

ビルドファイターズ トライ 〈Vs.〉

X君Vs.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ビルドファイターズトライでエクストリームガンダムtypeレオスII Vs. を活躍させたい話。

ガンダムEXA原作読み切っていないのでレオスIIの武装ちよつと違うかもしれないですがご勘弁…。

本作品でのレオスIIの扱いは彼のオリジナルの機体でございませぬ。

2 話 1 話

目次

5 1

1話

―ニールセン・ラボ―

ニールセン・ラボのバトルルーム。ここでは「チーム・トライファイターズ」のコウサカ・ユウマと「私立ガン普拉学園」のアドウ・サガのガン普拉バトルが繰り広げられていた。

「この2年間、お前の攻撃の対応策を頭の中で何万回と繰り返してきた！」

「ご苦労なこつて！」

ライトニングのビームライフルで複数のフアングをまとめて吹き飛ばす。

「なっ!？」

爆煙の中から現れるフアング。

「馬鹿な！フアングがなんであんなに持つんだ!？」

ライフルと頭部のバルカンで応戦するが、フアングがその攻撃を弾きながら接近してくる。

「特殊性なんだよお！」

フアングがライトニングを貫く。

「そ、そんな!？」

フアングが爆発し、ライトニング・ガンダムが墜ちていく。

「僕の…ライトニングが…」

呆然とするユウマ。

「渾身の…ガン普拉が…」

思い浮かぶのは2年間の努力。2年間、アドウ・サガに勝つためのガン普拉を作り続けてきた日々。

「2年間の…思いが…」

その2年間がライトニングが地面に墜落すると同時に砕け散るような気がした。

「これでも…届かないというのか…!？」

諦めるユウマ。動かないライトニングの眼前にはアドウ・サガのガンダム・ジエンド。

ガンダム・ジエンドがゆつくりとショット・ジエンドを構える。

ガンダム・ジエンドがその引き金を引いた瞬間――

「プロテクト・ビット!!」

その弾丸が、弾かれる。

「な、何が…?」

レーダーには自分の頭上に機体反応。

自分を救ったのは誰なのか、メインカメラを動かし探すユウマ。

「あの機体は…!!」

好戦的で獰猛な笑を浮かべるアドウ。

空からゆつくりと下降してくる機体が一機。

「ちよつとやりすぎじゃないか?アドウ」

その機体が翼を、拡げた。

「レオス…!」

「久しぶりだな、アドウ。そして、一旦引いてくれないか…?」

通信越しに苦笑いを浮かべるレオスと呼ばれた青年。

そして、構えたショット・ジエンドを謎のガンプラに向けるアドウ。

「残念だが、それは無理な話しだな!ここでお前と1戦やらせてもら

うぜ!お前の…!」

言いながら発砲するアドウのガンダム・ジエンド。

ライトニングの前にあつたはずのシールドが謎のガンプラの前に

現れ、弾く。

「エクストリームガンダムと!!!」

「そうだよなあ…。なら…!!!」

レオスのエクストリームガンダムのバックパックが一瞬煌めいた、

その瞬間――

「全感応ファンネル・アイオス!!!」

ファンネルがジエンドを取り囲み、撃ち抜いた。

「何…っ!?!」

ジエンドはギリギリで動くが、右のファーストジエンドと左腕、左足

が爆散する。

「ちいつ!!行けよっ!ファンング!」

残った左のフィストジエンドからファンングを放出する。

「ヴァリアント・ライフル！」

上空に飛び上がりながら、手にしたライフルで次々とファンングを撃ち落としていく。

「これでどうだよー！」

通常のものよりも強化されたファンングがエクストリームガンダムを襲う…が、

「高純化兵装・エクリプス！」

腰部に備え付けられたビーム砲から高出力なビームが放たれ、強化されたファンングを容易く打ち砕いていく。

その射線にはファンングだけでは無くジエンドもが含まれていた。

「クソがつ!!！」

堪らず、上空へと飛び上がりエクリプスを避ける。

「仕留めきれなかったか…、なら!!！」

ヴァリアント・ライフルを構えると、ファンネル2機と翼の1部が合体する。

「デイバイン・ブラスタァ!!！」

銃身内で圧縮されたビームがファンネルや翼のパーツのアシストにより高速で射出される。

圧縮され、出力の上昇したビームはその速度も上昇し、ジエンドに迫る。

「本気で行かせて貰うぜ…！」

ウイングを大きく展開し、腹部の口でデイバインブラスタァを吸収する。

「アブソープシステムか!?ならば！」

エクストリームガンダムのバックパックパーツから2本のブレイドを展開、合体させる。

「ブレイド・ビット!!！」

合体させたブレイド・ビットをジエンドに投げ付ける。

「舐めんなあー！」

左に避けつつフィストジエンドからビームを放つ。

「プロテクト・ビット！」

エクストリームガンダムは前方に手を突き出すとプロテクト・ビットが作動し、

「なんだとっ!？」

ガンダム・ジエンドの上半身と下半身が切り裂かれた。

「Battle Ended」

「これで満足か？アドウ」

静まり返った会場にレオスの呆れたような声が響いた。

会場の誰もが、レオスとエクストリームガンダムの一方的な勝利に、驚愕していた。

2話

「何でだ!!!なんでジ・エンドがやられた!? 一体何をしやがったあつ! レオス!!」

バトルルームの静寂を切り裂くような叫び声が響く。

誰もが思った。何故?あの瞬間、謎のガンプラはシールドを構えていたはず…。

「何をつて…言っただろ???ブレイド:”ビット”だつて」

「そういう事かよ…!わざわざ自分で投げつけて、ビットであることを悟られないようにしてやがったてのか…!」

「いやっ、そんなつもりは…。そもそも俺は言つたし…」

何だか微妙に会話が噛み合わない2人だが、相手の意表をつき、騙す技術としては良い手であることは間違いない。

「つとーそんな事よりだ!前から言ってるだろ?確かにお前は強い。が!幾ら相手の実力が君より下でも、相手を見下すような真似をするとお前の格が下がるんだ!そんなのもつたいないだろ?」

「ああ!!弱ええ奴に弱いと言つて何が悪い!」

そもそもお前はうるせえんだ!俺がうるさいのはお前がいつになつても人の話を——

レオスとアドウの言葉にユウマの肩が震えた。

そうだ、自分がどれだけ頑張つても、走り続けてもガンプラの出来も、バトルの腕前もあの男には届かなかつた。

嗚呼:僕が頑張ってきたこの2年間に、やはり意味など無かつたのだろうか。

仮に僕がバトルから身を置いていた間を全て使つてもアイツには敵わないのだろう…。やっぱ僕には…才能が…!!!

このままこの場にいたら立ち直れなくなりそうで…。大切なモノが僕から、無くなつてしまひそうで…!

「くっ…!!!」

気づいたらその場から、逃げ出してしまっていた。自分の”相棒”を置き去りにして…。

走って、走って、走り続けた。

さっきのバトルが、頭から離れない。過去の敗戦が頭をよぎる。さっきのバトルと被っていく。アイツを倒す事だけを考え、培ってきたガンプラ制作技術の全てを注ぎ込んだライトニングガンダムが…撃ち墮とされた…ッ！

「はあっ！はあっ！はあっ！はあっ！」

クソっ！クソっ！クソッ！クソっ！ちくしょうっ…！！

負けたっ…！またっ、負けたっ…！負けて、しまったッ…！

大切な人との約束が…！あの男の…！呪い^{あの一言が}の言葉が…！

「何が、約束を守るだっ…！」

僕はあの頃から何も変われてない…

「失ったものを、取り戻すだ…！」

何一つ学んでない…

「僕は…僕は何一つ…、何も…！」

僕は…もう…っ！

「コウサカ君…だよな？」

「貴方は…」

この人は…ガンプラ学園の…？

「レオス。レオス・アロイド。それよりこれ、君のガンプラだろ？」

「自分のガンプラを置き去りにする…っていうのはビルダーとしては赤点じゃないか…？」

苦笑いを浮かべながら言う彼の手には

「あっ…」

ライトニングガンダム
僕の相棒が握られていた。